

氏名	室 信 一 郎
授与した学位	博 士
専攻分野の名称	医 学
学位授与番号	博 甲第5456号
学位授与の日付	平成29年3月24日
学位授与の要件	医歯薬学総合研究科 病態制御科学専攻 (学位規則第4条第1項該当)
学位論文題目	Serum Anti-60S Ribosomal Protein L29 Antibody as a Novel Prognostic Marker for Unresectable Pancreatic Cancer (血清中抗RPL29抗体は切除不能膵癌の新しい予後予測マーカーとなりうる)
論文審査委員	教授 藤原俊義 教授 野田卓男 准教授 白川靖博

学 位 論 文 内 容 の 要 旨

我々は血清中の抗RPL29抗体が膵癌細胞の増殖を抑制することを報告してきた。今回、切除不能膵癌患者における血清中抗RPL29抗体価と各患者の生存期間との関連についてretrospectiveに検討した。

方法として、105人の切除不能膵癌患者の血清から抗RPL29抗体を測定し、RPLのcut-off値は62人のコントロール群の95%の信頼区間の値とした。

結果として、コントロール群と比較し、局所進行群(41人)と転移群(64人)それぞれで有意に抗RPL29抗体価が高かったものの、局所進行群と転移群の間では有意差は認めなかった。また、cut-off値よりも高値を示した49人のMSTは11.1ヵ月、それ以下の56人のMSTは5.6ヵ月で有意差を認めた($P < 0.0001$)。局所進行群でcut-off値より高値の22人のMSTが17.9ヵ月、それ以下の19人のMSTは10ヵ月であった($P = 0.0063$)。また転移群ではcut-off値より高値の27人のMSTは8.7ヵ月、それ以下の37人のMSTは5.9ヵ月($P = 0.012$)であり、抗体価が高い方が、予後が良いという結果であった。さらに予後不良となるリスク因子の解析を行った。多変量解析では抗RPL29抗体のcut-off値より高値(HR0.46)、腹痛・背部痛(HR1.74)、Performance status(PS) 0(HR0.48)、転移有り(HR2.34)が独立した予後規定因子であった。

結論として、抗RPL29抗体は切除不能膵癌の予後と関連しており、すでに報告されている予後因子(PSや腫瘍ステージ、CA19-9)と並ぶ新たな予後予測マーカーとなり得る。

論 文 審 査 結 果 の 要 旨

本研究は、血清中の抗60Sリボソームタンパク質L29(抗RPL29抗体)が、切除不能膵癌の予後因子として生存期間と関連することを示した後方視的な臨床研究である。

岡山大学病院で病理組織学的に診断された切除不能膵癌105人の血清から抗RPL29抗体を測定し、コントロール群62人の95%信頼区間をcut-off値として解析したところ、局所進行群、転移群いずれにおいても抗RPL29抗体価が高い方が有意に予後は良好であった。多変量解析では、抗RPL29抗体高値、腹痛・背部痛、Performance Status(PS) 0、転移ありが独立した予後規定因子であった。

本研究は、血清中の抗RPL29抗体価が切除不能膵癌の予後と関連しており、PSや腫瘍ステージ、CA19-9と並ぶ予後予測マーカーとなることを示した点で重要であり、本研究は価値ある業績であると認める。

よって、本研究者は博士(医学)の学位を得る資格があると認める。